

堀川

かくれ
産業・土木
遺産

名古屋駅と繁華街大須を結ぶ 洲崎橋・新洲崎橋

洲崎や天王崎は、かつて名古屋台地の西側が海だったころの岬で、湊もあり洲崎神社の入口には廣井城跡、天王崎港跡などの記載がある。この神社の神域は現在の栄一丁目全域に加え江川近くまでの広大なものであったが、清須越しの際大幅に削減された。神社前は紫川（現在は白川）との合流点でもあり、洲崎橋と新洲崎橋の間には暗渠出口がみられる。明治19年笹島に名古屋駅ができた。

当時名古屋最大の繁華街であった大須と駅とを結ぶために下広井通が造られ、明治22年11月、洲崎橋が堀川に架けられた。下広井通の道沿いには尾張時計、三重紡績、愛知電燈発電所などが進出、橋を東に行くと旭郭を経て大須観音や商店街に繋がった。

大正12年4月に旭郭は中村区の大門に移り、同年12月に門前町から水主町までの岩井（大須）通が開通、人と車の流れが変り往来が減っていく。一方、戦時中に軍用道路として百メートル幅の用地内は立ち退きとなった。やがて若宮大通となり、新たに新洲崎橋が架けられ、アメリカ村は白川公園となってこの一帯は一変する。

今では名古屋高速東山線も通るようになり、川から見ると二重の橋が架かっているように見える。高速道路を造る前に道路用地を掘り起し調査が入った。するとそこはかつての紫川の堀川合流地付近で船着場の遺構が現れた。それらは現在、記録に残して埋め戻されている。



洲崎橋上からの新洲崎橋 右手の洲崎橋親水広場下には旧紫川などの暗渠吐水口

建設	洲崎橋 最初の架設：明治22年 現橋：昭和10年 新洲崎橋：昭和35年
所在地	名古屋市中村区一丁目／中区大須一丁目
規模	洲崎橋：長さ29m 幅6m 新洲崎橋：長さ25.6m 幅35.5m

堀川

かくれ
産業・土木
遺産

水軍奉行屋敷跡に西洋病院 愛知医学校・愛知病院



愛知医学校・愛知病院 明治43年愛知県写真帖より

大須の西本願寺別院境内に置かれていた洋医の濫觴となる仮病院・仮医学校が、尾張藩の御船奉行だった千賀志摩守屋敷跡地へ、明治10年に移され、14年に改称して愛知病院と愛知医学校となった。現在、新洲崎橋左岸上流の堀川沿いに、当時の手術の模様を描いた柴田芳洲の錦絵が設置されている。錦絵の解説には、名古屋大学の源流と記されている。この西洋医学の病院と学校は、精進川（現：新堀川）開削の土砂で整備した鶴舞公園界隈で、関西府県連合共進会（博覧会）が開催された後の大正3年に鶴舞の地へ移転し、その後名古屋帝大創設2学部の一つとなった。

錦絵の中央で執刀中の若者が後藤新平、すぐ後ろに立つのが8か国語を使いこなした通訳で医師の司馬凌海、全体を指導するのがオーストリアから来日したお雇い医師のローレツだ。この二人の薫陶のもと、後藤は私立好生館病院（現・ホテルナゴヤキャッスルの地）を立ち上げた横井信之の方針を受け、25歳で病院長兼校長になった。その後内務省衛生局入り、台湾総督府民生官時代にインフラ整備や阿片撲滅などに力を発揮、衛生行政思想（いのちをまもる）の考え方を行政や政治に活かした。東京へ転出の際は、お雇い外国人を撤廃し、東京帝大から4名を教諭として招聘し、基盤造りも図っている。

経緯 明治4年：仮病院・仮医学校開設（名古屋藩元評定所他）
明治6年：西本願寺別院で仮病院として経営
明治10年：天王崎町（現：中区栄）に移転
明治14年：愛知病院・愛知医学校と改称
明治36年：愛知県立医学専門学校として新発足
大正3年：中区鶴舞町（現：昭和区）に移転
昭和14年：名古屋帝国大学創設、医学部となる